ザ・ひがしなだ

－東灘の歴史の足跡をたどる－

神戸深江生活文化史料館友の会

ザ・ひがしなだ

THE・HIGASHINADA

ー東灘の歴史の足跡をたどるー

道谷　卓
望月　浩　編著
望月友二

神戸深江生活文化史料館友の会

【発刊にあたって】

このたび、東灘区発足４０周年を記念して、東灘の史跡や町名の由来を１冊の本としてまとめて、発刊するはこびとなりました。

ご承知のとおり、神戸深江生活文化史料館は、深江・本庄地区の村史編纂過程で収集された多数の資料を公開展示するために、深江財産区管理会により、昭和５６年２月に創設されたものです。私達の祖先が遺してくれた貴重な生活の歴史をそのまま展示し、訪れる人々になつかしさとともに、肇で身近に歴史を感じとる事のできる、生きた教材を提供しています。この史料館を支えるために、研究員として活動しておられる望月浩氏・道谷卓氏・望月友二氏のご協力により、「ザ・ひがしなだ－東灘の歴史の足跡をたどる－」を刊行することができたわけです。

三氏は新進気鋭の郷土史家として身近な地域史を精力的に研究、また史料館を運営されています。史料館での資料の整理・常設展示や特別展の企画運営にあたりながら、「史料館だより」「歴史研究手帖」「東灘歴史ノート」等を発刊し、同時に、村史執筆委員として、その民俗文化財部会の執筆もしておられるわけです。さらに、東灘文化センター主催の「歴史講座」の講師としても活

躍され、現地見学会を含むわかりやすい歴史を市民に提供されています。その集大成として、昨年好評裡に発刊された『日本史の中の東灘』も道谷卓氏の著作によるものです。望月浩氏も「西岡本遺跡発掘調査」に直接加わるなど生きた研究もてがけておられます。

このように日頃より、神戸深江生活文化史料館を拠点として、東灘を中心とした地域史研究実績を持つ三氏が「東灘」についての詳細な歴史の足跡をたどり、史跡や町名の紹介・それらの由来等をわかりやすくまとめられる事はまさに当を得たものといえましょう。

この書物が郷土に愛着を抱き、生活文化や先人の遺した貴重な歴史的遺産を大切に後世に伝えて行く心が芽生えるきっかけになることを希望しています。

そして、東灘の歴史を知り、身近な史跡めぐりに欠かせない座右の書物となることを信じて止みません。

１９９０年４月

神戸深江生活文化史料館友の会
会長　　小嶋悦廊

ザ・ひがしなだ－東灘の歴史の足跡をたどる－

《目　次》

発刊にあたって……小嶋悦廊……3
数字で見る東灘……6
東灘略史……7
御影の史跡と町名……15
　御影の史跡……16
　御影の現行町名……24
住吉の史跡と町名……33
　住吉の史跡……34
　住吉の現行町名……41
魚崎の史跡と町名……47
　魚崎の史跡……48
　魚崎の現行町名……51
本庄の史跡と町名……53
　本庄の史跡……54
　本庄の現行町名……59
本山の史跡と町名……63
　本山の史跡……64
　本山の現行町名……71
参考文献（抄）……77
あとがき……道谷卓・望月浩・望月友二……78

表紙絵・伊東玲子

【数字で見る東灘】

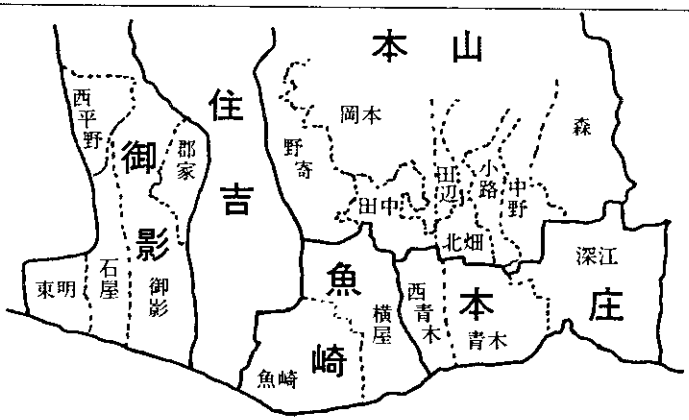
	東灘区(a)	神戸市(b)	(a)／(b)%
面積㎢	32.73	546.68	5.98
人口	188,134	1,464,344	12.84
(男)	91,427	706,380	12.94
(女)	96,707	757,964	12.75
世帯数	71,341	521,323	13.68
人口密度	5,748	2,679	(㎢あたり)
(以上、平成2年1月1日現在)			
自動車保有台数	58,432	458,146	12.75
運転免許保有者数	75,704	572,942	13.21
民営駐車場収用数	1,639	21,099	7.76
公園数	125	966	12.93
郵便局数	19	175	10.85
(以上、昭和63年度末現在)			
就業者数	82,801	625,405	13.23
(昭和60年10月1日現在)			

土地の高低

最高地、六甲山:931.3m／最低地、魚崎西町1:0.3m

(道谷　卓)

東灘略史



1889(明治22)年4月1日 東灘旧五ケ町村の誕生

—は1889年以降の行政町村界、---は江戸時代以来の村境
〔西平野は1929(昭和4)年に御影町に合併〕

東灘旧五ケ町村の誕生(『日本史の中の東灘』P123より)

【東灘略史】

はじめに

東灘区は神戸市の最も東南に位置し、東西約５km、南北約８kmを擁する区である。北に六甲の山々が、南には大阪湾が広がるという地形が夏は涼しく、冬はおだやかであるという気候を作り出している。

先史・古代の東灘

住吉東ノ平から先土器時代の石器や本庄・北青木・西岡本遺跡からは縄文時代の遺物が発見されている。原始時代から東灘は南向きの、水も豊かな生活に適した場所であったと思われる。

弥生時代になると水稲耕作が始まり、東灘でも住吉町からもみあとのついた土器や保久良神社で石庖丁が発見されるなど農耕生活の跡がうかがわれる。又、渦ケ森・森・生駒・本山からはそれぞれ銅鐸が、保久良神社からは銅戈がみつかり金属器の使用を示している。

農耕生活の発展は貧富の差を作り出し、小国家の成立を導いた。その中で成長した豪族たちは３世紀以来、自らの権威を誇示せんがため大きな古墳をつくるのであった。東灘でも処女塚・東求女塚・ヘボソ塚などの古墳が築かれた。

４世紀の半ばには大和政権が日本を統一し、氏姓制度をもとに豪族を支配していった。東灘でも、大和連・雀

部朝臣・住吉朝臣などの豪族の名がみられ、先ほどの古墳もこうした豪族の手によるのであろう。

7世紀になると大化改新をへて律令制による中央集権的国家を作ろうという動きが活発となる。律令制によれば東灘は摂津国菟原郡に属し葦原（本庄、本山東部、芦屋）・佐才（魚崎一帯）・住吉（本山西部、住吉）・覚美（御影一帯）の各郷に分けられた。律令国家は公地公民制に基づく班田収授法を実施したが、この時の土地制度が碁盤目状に土地を区切った条里制である。深江を東西に流れる高橋川や御影にある一ノ坪、篠ノ坪といった地名はその名残である。

奈良時代にはいると律令制も動揺しはじめ、荘園が出現するのである。法隆寺領の水田や、平安時代には山路荘の名もみられる。

中世の東灘

政治の担い手が貴族から武士へと変わり、その中でも平家が政権をとった。その平家と源氏が古代から中世への節目となった源平の争乱を戦いこの東灘もその舞台となった。平家物語や源平盛衰記などの文学作品には雀の松原・御影といった地名が登場し、一の谷の戦いでは源範頼がこの辺りに陣を張ったという。

鎌倉から室町時代への移行期である南北朝時代には湊川の戦いが行なわれ、楠木正成が東灘を通って湊川へ向かい、その戦いで敗れた新田義貞は処女塚で足利軍と一戦を交えた。その後将軍となった足利尊氏は内紛で弟直

義と観応の擾乱をおこし、両者は打出・御影浜で戦った。このような戦乱の中、この地方の土豪は平野城や山路城を築いている。

戦乱の中、農民たちの結束も固まり郷村ができ、東灘にも郡家・住吉・野寄・岡本・田辺・北畑・小路・中野・森・石屋・横屋・田中・東明・御影・魚崎・西青木・青木・深江といった村々が戦国時代の末にはできあがった。

近世の東灘

織田信長のあと天下を統一した豊臣秀吉は検地を行ない、天正の頃には東灘はほぼ全域が豊臣家の直轄地となった。

豊臣氏が徳川幕府に滅ぼされると、幕府は東灘を天領とせず、尼崎藩に組み入れ、以後、戸田・青山・松平といった大名たちが尼崎藩主となりこの東灘を支配したのである。江戸時代には農村であった東灘も京・大坂に通じる街道筋のため、産業が発達した。水車業・御影石の切り出し・酒造業などが盛んに行なわれた。中でも酒造業は灘の生一本として全国に知られた代表的産業であった。

この産業の発展した東灘に幕府は注目し、1769年に明和六年の上ケ地令を出し、東灘南部の主だった村々を天領にするのであった。

近・現代の東灘

幕府が滅亡し明治政府になると、東灘の旧天領の村々は兵庫県となりその他はそのまま尼崎藩が支配した。廃藩置県で尼崎藩は尼崎県となり、後に兵庫県に吸収された。明治７（1874）年には神戸・大阪間に鉄道が開通し住吉駅が開業している。

明治22（1889）年、市制・町村制が施行され、神戸市及び東灘区の前身、御影町・住吉村・魚崎村・本庄村・本山村の東灘旧五か町村が誕生した。

東灘旧五ケ町村の誕生

1889（明治22）年４月１日、前年に公布された市制・町村制に基づき東灘区の前身である御影町、住吉村、魚崎村、本庄村、本山村の五ケ町村が誕生した。また、この時神戸市も同時に誕生している。

・御影町…郡家村・御影村・石屋村・東明村が合併
（西平野村は1875年に灘区の高羽村と合併し、その後1929年に御影町と合併）

・住吉村…もとから非常に大きな村のため単独で一行政村を組織する。

・魚崎村…魚崎村・横屋村が合併。
（1914年に町制が施行されて魚崎町に）

・本庄村…深江村・青木村・西青木村が合併し、旧荘園名にちなみ「本庄」と名付ける。

・本山村…森・中野・小路・北畑・田辺（旧本庄）の各村と岡本・野寄・田中（旧山路荘）が一体となり、「本庄」と「本山」の頭

文字をとり「本山」と名付ける。

その後、近代化に伴う交通機関の発達で東灘は大阪・神戸の郊外住宅地として発展していった。

昭和13（1938）年の阪神大水害、昭和20（1945）年の大空襲で大きな損害をこうむった東灘も、町の復興で戦後が始まった。

そんな中、神戸市からの合併誘致が五ケ町村を走り、昭和25（1950）年4月1日、まず御影・住吉・魚崎の三ケ町村が神戸市に合併し、ここに東灘区が誕生したのである。そして、半年後の10月10日に残りの本庄・本山の両村も合併し、現在の区域になった。

東灘区の誕生

街の復興で戦後の歴史が始まった五ケ町村も、戦後まもなく神戸市との合併問題が表面化して、それぞれの町村で論争がおこった。

昭和23（1948）年、神戸市は五ケ町村に対して正式に合併を申し入れたが、その後、芦屋市も同様に合併を申し入れた。御影町、魚崎町は神戸市との合併に積極的であり、戦前は富裕で独立心の強かった住吉村も合併を考えはじめていた。しかし、神戸市との合併により地域の主体性が無くなることを心配した住民の中に、五ケ町村が一緒になって新しい市（甲南市あるいは灘市）をつくるという構想が生まれ、一時はこれに芦屋市も加わる様子を見せ複雑化

させた。

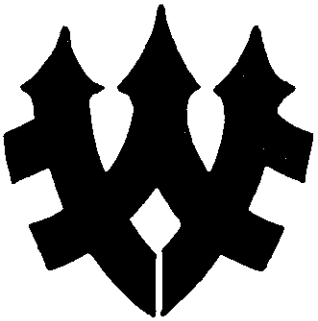
結局、昭和25（1950）年４月１日、御影、魚崎、住吉の三ケ町村が神戸市と合併することになった。ここに東灘区が誕生したのである。ところが誕生した区の名称について論争がおこった。三ケ町村はこのあたりが本来「灘」の中央部であることから、「灘区」にすべきであると主張したが、すでに神戸市は西隣りに「神戸市灘区」を持っていることから問題となった。そこで、この「灘区」を「西灘区」とし、こちらを「灘区」にすべきであるという意見が飛び出しまた、「本灘区」にせよという意見まで出たのである。結局、神戸市長一任で決まった名前が「灘区」の東ということから「東灘区」。

残る本庄、本山の両村でも住民投票やリコール運動の末、1950年10月10日、神戸市と合併し、現在の東灘区の区域が出来上がったのである。

こうした街に現在、約１９万人の人々が生活をし、未来への町づくりを進めながら、新しい時代に飛躍しようとしている。

（道谷　卓）

御影の史跡と町名



旧御影町町章

この町章は昭和４年に制定されたもので、古歌に歌われた「御影の松」にちなみ、松葉三本を組合せた。

【御影の史跡】

① 処女塚古墳（御影塚町２丁目）

南向きの全長70㍍の前方後方墳。古墳時代前期に築かれた。昭和54（1979）年度からの史跡処女塚古墳整備事業で発掘調査が行なわれ、墳丘斜面の葺石の存在や、前方後円形と考えられていた墳形が前方後方である可能性が強くなったこと、などがわかった。この古墳には、芦屋の美しいひとりの娘をめぐって、立派な若者２人が争い、やがて３人とも死んでしまう悲しい伝説がある。また「太平記」には、小山田太郎高家の処女塚の上の戦いぶりがのっている。小山田高家は、従軍中に付近の農家の麦を刈り取ったために、軍法で死刑を宣せられた。しかし、義貞が高家の陣を見ると軍備は整っているが食料の貯えがないように見えた。そこで「武将に兵糧の不自由をさせたのは私の責任だ」と麦の代金を畑の持ち主に支払った。そして、麦を高家に渡した。このことがあってから高家は、深く恩義を感じ、処女塚の奮戦につながったといわれている。

② 東明八幡神社（御影塚町２丁目）

旧東明村の氏神。祭神は応神天皇。東明の地名は、神功皇后の大臣武内宿禰がここから遠目に見ながら魚崎の造船の指図をしたため遠目と呼び、それが東明になったといわれている。また朝鮮遠征の帰り、ここまできたと

きに夜が明けて東の空が白みはじめたので東明の名がついたといわれている。なお、境内に「武内の松」と呼ばれる、武内宿禰が植えたといわれている松の株がある。

③　菅公船繋ぎの松（御影石町２丁目）

昌泰４（901）年菅原道真が大宰府へ向かう途中に、船を繋いだ松だといわれている。現在は綱敷天神のお旅所になっている。

④　浜街道の名残（御影本町６・８丁目）

西国街道は、京都から西へ向かっていくと芦屋の打出あたりで２本に分かれる。北側の道は、ほぼ国道２号線沿いに通り、南側の道は43号線沿いに通り、生田神社の

浜街道の名残

南側付近で合流する。2号線の西国街道は大名の参勤交代の通る道であった。江戸時代の中頃にその名がついたといわれる43号線沿いの街道は浜街道と呼ばれた。庶民の通る道としてバイパスの役目を果たしてきた。

⑤　西方寺（御影本町6丁目）

浜街道沿いにある浄土真宗本願寺末の寺。本尊は阿弥陀如来。境内には有名であった「御影の松」を歌った歌碑がある。

「世にあらば又帰りこむ津の国の御影の松よ面かはりすな」　藤原基俊

「よみ置きし松のことはのちりうせずふたたび千代のかけぞ栄えむ」　藤原正房

⑥　住吉ステーションの碑（御影本町1丁目）

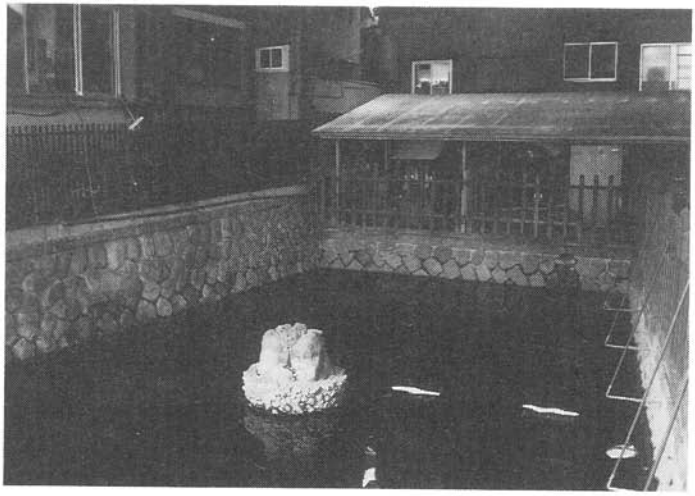
明治14（1882）年6月に嘉納治良平・豊田為介によって建てられた道標。表面に、「従是住吉ステーション迄九丁四十五間」と刻まれている。明治の初め、鉄道が計画されたとき、当初は浜辺を通る予定であったが、酒造家に「汽車の出すゴヘラ（煙）で酒がくさる」と反対され、山麓部に変更した。しかし、そこには何本もの天井川が形成されていたために、川底トンネルを掘らなければならなかった。そこで、外国人技師たちが難工事の指導をした。トンネルが掘られ、鉄道が大阪―神戸間に開通したのは、明治7（1874）年のことである。

⑦　御影標柱（御影本町４丁目）

大正２（1913）年に建てられた。この御影の標柱は、他の村にある道路元標と違い、明治40年代から大正３・４年頃までの間に兵庫県によって建てられたもの。神戸・尼崎・西宮・神崎への距離が刻まれている。

⑧　沢の井（御影本町４丁目）

この沢の井で神功皇后が、化粧のため姿を映したために御影の地名が出たといわれている。また、後醍醐天皇に村人がこの沢の井の水を使ってお酒を献上したところ、たいへん喜ばれて、それから献上した村人は、「嘉納」の姓を名のりはじめたと伝えられている。この沢の井の南あたりに、枳殻（カラタチ）の垣で囲まれた“枳殻御



沢の井

殿”というところに神功皇后が住んでいたといわれている。なお、阪神御影駅の北側には、この沢の井のモニュメントがつくられている。

⑨　西国橋（御影石町３丁目）

西国街道は、元々山陽道といい、平安時代には京の都と九州大宰府を結ぶ幹線道路であった。江戸時代に西国と畿内を結ぶ交通路として栄え、西国街道の名で親しまれてきた。その名がこの西国橋に残っている。

⑩　徳川道起点（御影石町３丁目）

徳川道は、慶応３(1867)年に兵庫開港に際して、外国人と日本人の接触を避けるため、西国街道のバイパスとしてつくられた。全長約34㌔で、御影―柚谷―摩耶山―小部―藍那―白川―高塚山―大蔵谷とつながっていた。しかしほとんど利用されることなく、翌年１月には、三宮で神戸事件（備前藩士が外国人を刺傷した事件）がおこっている。（この事件で切腹した滝善三郎の墓が東灘区森の墓地にあった。）徳川道は、同年８月、廃道になった。

⑪　御影公会堂（御影石町２丁目）

昭和８（1933）年に白鶴酒造の嘉納治兵衛の寄付金によって、武庫郡御影町の公会堂として建てられた。昭和20（1945）年の空襲で被害を受け、昭和25（1950）年御影町が神戸市編入後、市の手で改修され、昭和28（1953）

年に再開した。

⑫　一里塚橋（御影中町７丁目）

西国街道沿いの一里塚があったところ。江戸時代には、街道の一里ごとに一里塚が築かれていた。この辺りでは芦屋の津知・脇浜につくられていたという。たいていは９㍍四方、高さ３㍍の塚の上に榎の木を植えたものであった。道の両側にあるのが原則であった。

⑬　綱敷天満神社（御影町石屋）

旧石屋村の氏神。祭神は菅原道真。大宰府へ向かう途中で菅原道真が、この地に休息をしたとき、土地の豪族の山背というものが石の上に綱を敷いて席を設けてもてなした。後に道真が神として祀られるようになってから

綱敷天満神社

その子孫の菅原善輝がこの地に道真を祀り、故事にちなんで今の社名にしたと伝えられている。須磨の綱敷天神にもこれと同じような伝説が残っている。

⑭　中勝寺（御影町郡家）

文安年間(1444～1449)に創建。浄土宗知恩院末。本尊は阿弥陀如来。永正２（1505）年に平野秀満が祖先の備前守忠勝の菩提寺とし、平野山忠勝寺とした。その後明和４（1767）年に火災にあい、再建されたときに平等山中勝寺と改称した。

⑮　香雪美術館のキリシタン灯籠（御影町郡家）

戦国時代の大名であり、茶人でもあった古田織部の創案といわれている。その特徴は、

・竿の部分が四角である。
・台石をともなわず、地面に埋め込んでいる。
・竿の上部がふくらみ、わずかに十字形になっている。
・竿の中央下部に、舟型光背に彫りくぼめ、立像が陽刻されている。
・ふくらみの部分にローマ字に近い記号が陰刻されている。

⑯　弓弦羽神社（御影町郡家）

旧郡家村の氏神で、祭神は伊弉冉尊・速玉男尊・事解之男尊。社伝によると、朝鮮より帰国の神功皇后に対して、謀反を企てた忍熊王がこの地に軍を置いて戦勝を祈

り、その背山に熊野権現を勧請したのが縁起とされる。また、神功皇后が朝鮮に向かうときに東明の北方の丘陵で、弓矢を試しに射たのでこの名がついたともいわれている。

⑰　平野城（御影山手）

南北朝時代に赤松範資の家臣平野氏の居城であったと伝えられている。大手筋・滝が鼻・城ノ前などの地名が城のあったことをしのばせる。

⑱　深田池公園（御影山手１丁目）

今は憩いの場所になっているが、元々は近くにあった浅田池・泥田池などと共に溜め池であった。平野城の堀の役目も果たしていたと思われる。深田はフケダ＝湿地帯の地名＝からきていると思われ、泥田池の名と共にこの辺りは湿地帯であったと思われる。

⑲　旧御影町役場跡（御影本町６丁目）

現在の兵庫県予防医学協会と浜御影保育所の位置にあった旧御影町役場の建物は、大正13（1924）年に落成した、近世ドイツ風の鉄筋コンクリート２階建の堂々たるものであった。合併後は一時区役所の本所と御影出張所が置かれたが、昭和53（1978）年にはその建物も解体され、今では「旧御影町役場跡」という大きな記念碑があるだけである。

（望月　浩）

【御影の現行町名】

☆御影町御影（みかげちょうみかげ）

阪急からＪＲまでの間で、榎本、上之山、岸本、城之前、篠坪、滝ケ鼻、平野の小字がある。この御影町御影を中心に東の郡家、西の西平野、石屋といったところは東灘区内でも唯一、小字名の残っている区域である。昭和51（1976）年には阪急より北の深田、池之上、御影山といった地区が分かれ御影山手となった。城之前は御影山手の御影北小学校付近にあったといわれている中世の平野城のおもかげを残す地名である。また、滝ケ鼻は竹ノ花とも書かれ、街道などから城館をかくすために植えられた竹藪の名残の地名だといわれ、平野城に関係する地名である。また、その北の平野という地名は平野家と何らかの関係があるのかもしれない。篠坪（しのつぼ）は四之坪のことで、西平野にある一之坪とともに条里制遺構の名残である。なお、岸本は昔の住吉川の流路を示す名残だという。

明治22（1889）年４月、町村制施行に伴い、御影、石屋、東明、郡家の四ケ村が合併して「御影町」が誕生した。平安時代の『和名抄』にある菟原郡八郷のうち「覚美（かがみ）郷」は徳井、石屋、平野、御影の地域にあたるとされている。『武庫郡誌』には菟原郡の豪族として鏡作連（かがみつくりのむらじ）をあげており、カガ

ミは古代の職業的部民「鏡作部」がいたことによるのではないだろうか。

「御影」という地名のおこりにはいろいろな伝説が残されている。よく知られているものとしては、１４代仲哀天皇の皇后、神功皇后にまつわる伝説である。これは皇后が三韓出兵からの帰り、御影の浜に上陸されそこに湧く美しい泉（沢の井）にその御姿を映されたことから「御影」の名がついたとされるものである。また、本住吉神社の神影が現れるところから、この背後の山に御影山の名が付いたという話や、さらには聖徳太子の母后が難波で西方に向かって仏を拝まれたところ、この地の山越しに阿弥陀仏のお姿が現れたので御影の名がついたという言い伝えもある。しかし、これらはあくまでも伝説の上での話であり、とうてい事実とは言い難い。

それでは、史実の上からその由来を考えるとどうなるのだろうか。先ほど述べた『和名抄』の中の「覚美郷」によるとするのが一番妥当であろう。すなわち、古代に鏡を作る職人集団（鏡作部）が住んだことから、「鏡＝覚美」の名がつけられ、そこから鏡に映す姿である御影という名に変化していったものと思われる。

☆御影石町（みかげいしまち）

旧石屋村のうちＪＲより南の区域である。昭和43（1968）年、北から御影町石屋字左美也、御量（４丁目）、旭詰（３丁目）、公方公、喜寅（２丁目）、辰巳、磯之

辺（１丁目）が新町名「御影石町」を名乗った。この町名は旧石屋村の石をとって命名されたものである。

１丁目の石屋川沿いには、灘の酒造の本場らしく酒蔵が密集しており、波かえしのある酒蔵や焼羽目板の続く酒蔵が目をひいている。冬の仕込みの頃になると豊潤な酒の香りがあたりを漂い、道行く人を酔わせてくれる。

☆御影町石屋（みかげちょういしや）

旧石屋村のうちＪＲより以北の区域である。八色岡（やくさのおか）と朝后の字名を残している。石屋の名は古代の豪族石作連（いしつくりのむらじ）の一族が住んでいたことにちなむといわれている。八色岡に菅原道真を祭る、旧石屋村の氏神・綱敷天満神社がある。

ところで、旧石屋村は江戸時代、石工の村として盛えていた。六甲南麓で採れる花崗岩は早くから良質の石材として切り出されており、全盛期の江戸中期には荒神山などに採石場が開かれ、この石屋村で加工され、御影の浜から船積みされ全国へと渡っていった。ここから御影石の名が付いたもので、御影石が採れるからその地に御影という地名を付けたのではない。石の名より、地名の方が先なのである。この御影石も大正時代にはセメントの進出などで衰えていった。

☆御影町郡家（みかげちょうぐんげ）

郡家の北にある弓弦羽山はもと竜神岡といわれた祭祀の場である。阪急からＪＲまでの区域には石野、大蔵、垣ノ内、庄田、庄ノ元、地蔵元、千本田、上山田、下山田、堂ノ裏、堂ノ前、寺ノ前、村田、馬場添、宮ノ裏といった字名がある。昭和51（1976）年に阪急より北側の部分が御影山手として分かれた。

馬場添には、旧御影村、郡家村の氏神で、伊弉冊尊、速玉男命、事解之男命を祭神とする弓弦羽神社があり、千本田には平野城主、平野忠勝ゆかりの中勝寺がある。村田には農村時代の溜池があったが今は埋められてもうない。

郡家は古くには「こおりのみやけ」「こおり」とも読み、大化改新のあと全国に設けられた、律令の国・郡・里という地方制の中の郡衙（ぐんが・郡司の役所）のことをさす。とすれば、律令時代このあたりは摂津国菟原郡と呼んでおり、菟原郡の郡衙があった場所ではないだろうか。なお、城之前や大蔵で行なわれた最近の発掘調査からも、それを裏付けると思われるものが出てきている。

☆御影町西平野（みかげちょうにしひらの）

阪急と御影町石屋にはさまれた区域をさし、大原、一ノ坪、伊賀塚、ケジメ、平野、東松本、西松本の小字が残っている。昭和51（1976）年、阪急より北の天神山、宮谷山、大仏ケ原、後裏、大谷、寅新田が御影山手とな

った。

御影町郡家の北にある弓弦羽山のふもとの傾斜地を墾いたところが平野、その西に開墾されたところから西平野という名が付いたという。

伊賀塚は江戸時代の書物に記載のある伊賀塚古墳があった場所であろう。一ノ坪は古代、条里制の遺構を示す地名である。

☆御影塚町（みかげつかまち）

昭和42（1967）年、御影町東明字那古浦（1、3丁目）と字乙女塚（2、4丁目）が新町名「御影塚町」を名乗った。新町名は万葉歌人にも歌われた処女塚にちなんでいる。

処女塚古墳は南向きの全長70㍍の前方後方墳である。住吉宮町と灘区都通にある二つの求女塚が、この処女塚をはさんで向かいあっている光景は、あたりにさえぎるもののない古代の海上から見れば壮観であっただろう。慕い寄る血沼壮士（ちぬおとこ）と菟原壮士（うないおとこ）の二人の男を、いずれとも選びかねて自ら入水自殺した菟原処女（うないおとめ）の伝説は女心の優しさや激しさを物語り、万葉の時代から多くの感懐を生んできた。これら三基の古墳は考古学的にみて築造年代にかなりの差があるため、処女塚にまつわる伝説をそのまま史実とみるわけにはいかない。古墳時代にこのあたりを支配していた豪族の墓ではないだろうか。

さて、このあたりは江戸時代、東明村（とうみょうむら）と呼ばれていた。今でも幼稚園、公園、郵便局にその名を残しているが、その由来については諸説がある。まず、東明村は中世には徳井村を中心とする徳井荘に属しており、徳井あたりからみて遠くに見えるため、遠目（とおめ）の浜と呼び、それが転訛したのだとする説がある。また、神功皇后にまつわる伝説もある。魚崎で軍船を建造した時、神功皇后の大臣武内宿禰がここから遠目に見ながら造船の指図をしたため遠目といい、それが東明になったとか、皇后が朝鮮への出兵からの帰り、軍船がここまで来た時、夜が明けて東の空が明るくなってきたのでこの名がついたという伝説もある。さらには、処女塚の処女（おとめ）が訛ってトーメとなったともいう。

☆御影浜町（みかげはままち）

昭和40（1965）年に付けられた町名で、もとの御影町御影字浜西の一部と浜中の一部、弓場の一部を含むが、ほとんどが公有水面の埋立て地である。東は住吉浜町に接し、北は御影大橋で御影本町と結ばれている。東部埋立地第二工区の西半分にあたり、石油化学、酒造精米工場がならぶ工場地帯である。

☆御影本町・御影中町（みかげほんまち・―なかまち）

ＪＲから阪神までが中町、阪神から埋立て前の海岸線までが本町。

御影本町は昭和42（1967）年、御影町御影字浜東の一部、上東、弓場、上弓場、沢の井、浜西の一部、上中、上西が一つの町になった。

阪神御影駅から南へ下ると一帯が酒造りの町。どこからともなく酒造り唄が聞こえてくるような気がする。字名にあった沢の井は御影の地名の由来にちなむもので、阪神御影駅の高架下に今でも清水が湧いている。伝説によれば、南北朝時代にこの泉の水で酒を醸して、後醍醐天皇に献上したところ、たいそう嘉ばれて酒を納められた。その時からあたりの酒造家は嘉納の姓を名乗りはじめたという。また、本町６、８丁目には西国街道の浜街道の街並みが残る一角がある。この街並みの中ほど、影松山西方寺の境内に古来からの名勝で多くの文学作品にも登場する「御影の松」の古跡がある。名松は明治時代に枯れてしまい、今では二代目の若い松が植えられている。

阪神御影駅の北側が御影中町。本町と同時に、御影町御影字柳、但馬口の一部、申新田、一里塚の一部、掛田の一部が一つになった。御影小学校正門前に天神川が流れているが、この川の校地北東角にかかる橋が「一里塚橋」である。この橋のかかる東西の道が西国街道の本街道であり、江戸時代には大名行列がここを往来した。御影中学校西門わきの老松はその頃のおもかげを残す並木の一本だという。

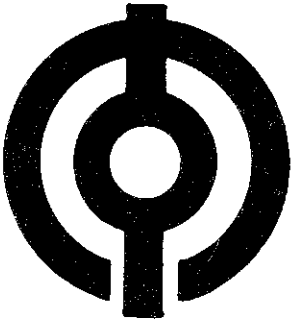
☆御影山手（みかげやまて）

昭和51（1976）年、御影町御影、郡家、西平野、住吉町九重ケ坂、鍋島、灘区土山町の各一部が合併してできた町名である。旧御影町の区域のうち、阪急より北の部分にあたり、高層住宅団地をはじめ多くの住宅が立ち並ぶ、公園の多い住宅地域である。

阪急御影駅のすぐ北にある深田池は農村時代の溜池のあとで、現在では緑に囲まれた自然の美しい公園になっている。また、室町時代には平野忠勝の居城、平野城が現在の御影北小学校の辺りを中心にあったといわれている。この城は城郭を持たず、自然地形の高台を利用した砦だったらしい。なお、御影町御影にある城之前という地名や、御影中学校西の大手筋といった通りの名から平野城の面影がしのばれる。

（道谷　卓）

住吉の史跡と町名



旧住吉村村章

この村章は昭和12年に制定され、全国公募によるもので、ひらかなの「す」をもとにした。

【住吉の史跡】

① **東求女塚古墳**（住吉宮町１丁目）

前方部を北西に向けた、古墳時代前期の前方後円墳。全長80mの古墳であったが、明治37（1904）年に阪神電鉄の鉄道敷設の土取りで前方部は消滅し、後円部は、昭和30(1955)年に削平された。明治から大正にかけて古墳の破壊と共に、遺物採集も行なわれ、銅鏡・車輪石・木片などが発見されている。また、昭和57（1982）年に発掘調査され、土師器・須恵器なども出土している。

② **本住吉神社**（住吉宮町７丁目）

祭神は、表筒男命・中筒男命・底筒男命・神功皇后。創建は伝説によると、神功皇后が朝鮮遠征の帰り、難波近くで船が止まってしまったので原因を占ってみると、表筒男命・中筒男命・底筒男命の三神があらわれ、「大津渟中倉之長峡に住吉三神を祀れば航海を安全にしよう」といった。そのために祀られたのが、今の本住吉神社で、大阪の住吉大社はここから分家したものだといわれている。

さざれ石…境内にあるさざれ石と呼ばれる石の上部のくぼみには、雨が降っても決して水がたまらないといわれている。しかし、６月頃になると、水が湧きだしてたまるといわれている。現在は地中に埋もれている。

③　阿弥陀寺（住吉本町２丁目）

浄土宗で、本尊は阿弥陀如来。寛永14（1637）年に天誉上人が開基した。その後、火災にあって中断したが、安永９（1780）年に勇誉上人によって再興された。明治22年最初の住吉村の村役場はこの寺の境内にあった。

法然の松…建永２（1207）年法然上人は、土佐の国に流されることになった。京を出て船で降りる途中、神戸市の今の脇浜近くで大雨にあい、海岸の松の下で雨宿りをした。その松は年がたつと枯死したが、その枯れ木の一端が住吉の海岸に漂着した。そこで村人は阿弥陀寺の境内に安置した。

④　庚申塚（住吉本町３丁目）

小林墓地の東の道を南へおりて、阪急電車のガードをくぐったところにある。マンションの建ち並ぶ中、土盛りの塚がある。この塚が庚申塚で、元来前方後円墳の後円部分であったといわれている。塚の上の石碑には、正面に「南無聖面金剛童子」、向かって右に「庚申講中立之」、左に「寛永年中前横田五兵衛新築此塚也　宝永二乙酉秋天同名孫此石碑建也」と刻まれている。庚申信仰とは、60日に一度回ってくる庚申の日（十干十二支の一つ）に夜を寝ずに過ごす信仰のことである。これは、人の身体のなかにいる三尸という虫がこの日に人が眠ってから体内から抜け出して、天帝にその人の日頃の罪悪を

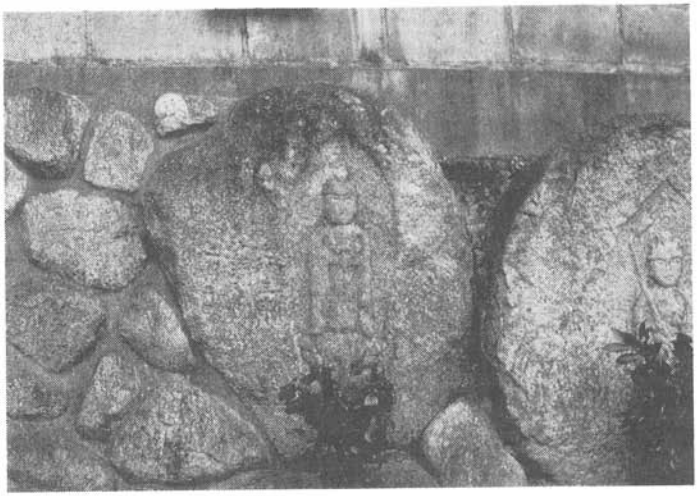
告げるために、その日は眠らずに起きているという信仰である。

⑤　小林墓地の石仏（住吉山手２丁目）

小林墓地の北の入り口に、石垣に埋め込まれている。左端の石仏に「文禄三年道源禅門二月□日」と銘文が見られる。現在わかっている東灘区内最古の在銘の石造遺品である。従来寄せ集めの六地蔵といわれてきたが、像容を見るかぎり、観音仏ではないかと思われる。

⑥　柿の木地蔵（住吉山手３丁目）

高さ約80cmで、すぐ側に柿の木があることからこの名がついた。大正10（1921）年頃、牛車を引いていた人が



文禄三年銘のある石仏

この地蔵に牛を結びつけて休んでいたところ突然牛が暴れだし、地蔵は倒れ首の所から折れてしまった。後に地元の人々が再建した。台石はもっと古く、「日本廻国、本願主相州小田原定吉」「村安全往来安全、嘉十郎」「武州勇勇山、相州小田原同□尼」「嘉永六年丑正月廿二日」の銘文があり、江戸時代の末に建立されていたことがわかる。

⑦　**若宮八幡神社**（住吉山手５丁目）

祭神は応神天皇。神も、人間と同様に子供を産むという観念から、御子神を祀る風習ができた。若宮は本宮ないし親神に対する新宮、御子神のこと。しかし、民間の若宮信仰は、非業の死をとげたものの霊、まだ神霊に昇華しきれない霊魂を若宮と呼んでいるところが多い。

⑧　**徳本寺**（住吉山手６丁目）

浄土宗で、本尊は阿弥陀如来。寛政10(1798)年呉田の吉田道可に招かれた徳本上人は、赤塚山に庵を建てて、弓弦羽の滝で修行をしながら、村人たちに念仏を唱えると極楽往生できると説いた。現在の徳本寺は、大正６年に徳本上人百回忌を記念して建てられたものである。

徳本上人…宝暦８（1758）年紀州日高に生まれ、25、６才の頃、仏門に入る。30才の頃から６ケ年を大和吉野の山中、紀州須が谷山頂で難行苦行の生活をして、修験的な力を創成した。後に徳本行者と呼ばれた。以来、諸国

を巡錫して各地に念仏講を広めていった。

名号塔…阿弥陀如来をたたえる「南無阿弥陀仏」を名号または六字名号と呼んでいる。一遍上人が名号を本尊とするようになった。浄土宗・浄土真宗・時宗が主に使用している。徳本寺の名号塔は文政9（1826）年に吉田道可が建てたものである。徳本上人独特の蔦名号である。

吉田道可…享保19（1734）～享和2（1802）年の人。名は敬。通称、喜平次。先祖は南朝の内大臣、吉田定房。三男の幸麿が自分の荘園だった住吉に逃れ、そのまま住みついた。江戸時代には、農業・酒造業・精油業などを営み、また、千石船で廻船業なども行なっ

徳本寺

ていた。道可は、和歌・書・儒学・茶道
などを学び、文人との交流も広かった。

⑨　火伏地蔵（住吉山手６丁目）

徳本寺の境内の隅にある。元は、徳本寺の西の坂道を少し上ったところに愛宕地蔵尊として祀られていた。住吉村を火災から守ってくれるといわれ、信仰を集めてきた。蓮華座の上に立ち、舟型光背に浮き彫りにしている。右手には錫杖、左手には宝珠をもっている。

⑩　赤塚山（住吉山手）

六甲山は修験者の行場として、あちこちで行を行なっていた。赤塚山もそのひとつで、行者堂もその名残のひとつである。修験道は、原始的山岳信仰と仏教の密教的信仰とが合わさった宗教。山岳に登り、修業をつみ呪力を体得し、それに基づき加持祈禱をする。奈良時代の役小角（役行者）を初祖とする。

⑪　御影石の石切り場跡

深いＶ字谷となっている住吉谷の中ほどにある五助ダムから西の六甲山上に至る山道を石切り道という。この付近、五助ダムやさらに下流の荒神山には古い石切り場があって、ここから産出された良質の花崗岩は400年もむかしから各地に売られていた。御影の浜から積み出されたその石材が良質であったため、花崗岩一般を御影石と呼ぶほどにこの地の石材は知られていた。明和７（1770）

年大坂の石問屋株仲間の出現、さらに大正時代のセメントの進出などで、御影石の切り出しはおとろえていった。

⑫　旧住吉村役場跡（住吉宮町７丁目）

旧住吉村役場は現在の住吉幼稚園（住吉宮町７丁目）の位置にあった。木造２階建てのこの建物は移転前の住吉小学校のもと校舎を役所に転用したものである。元来が教育施設故、使い勝手が悪いと、近接町村のような立派な庁舎の構想を建て積立金を設けたが結局実現しなかった。昭和20（1945）年６月の空襲で、この建物も全焼し、一時、住吉国民学校に仮庁舎を置いたが、戦後、再びもとの住吉幼稚園の位置に戻った。合併後は今の区役所の場所に木造モルタル２階建ての区役所住吉出張所が設置された。

（望月　浩）

【住吉の現行町名】

☆住吉宮町（すみよしみやまち）

住吉の由来は当地に本住吉神社が祀られていることからきている。本住吉神社の祭神は表筒男命、中筒男命、底筒男命、神功皇后であり、『日本書紀』にある広田・生田・長田と同じく神功皇后が朝鮮遠征の帰りに武庫の泊りで行き悩み、三海神の指図で祀った「沼名椋（ぬなくら）の長峡」がこの地になるという。しかしその所在地については、大阪市住吉区にも該当する地名があるため二説に分かれるが、現在では大阪の住吉から漁業の守り神として勧請したとする説が有力視されている。
住吉宮町は昭和44（1969）年からの地名で、もとは住吉町求女・住吉町泉・住吉町吉田・住吉町宮東の一部、住吉町唐松・住吉町茶屋・住吉町宮西の一部と呼ばれていた。

吉田は、建武2（1335）年、南朝の内大臣吉田定房の三男幸麿が、自分の荘園だったこの地に逃れ、住吉神社の東、国道2号線沿いの北（現在の吉田区会館）に居宅があったことから名付けられた。

茶屋は、旧西国街道の両側に、旅人の休み茶屋があったことから名付けられたという。

☆住吉本町（すみよしほんまち）

昭和（1985）60年からの地名で、元は住吉町垣内・住吉町九郎左衛門新田・住吉町反高林・住吉町中島・住吉町古寺・住吉町坊ヶ塚・住吉町宮西・住吉町宮東・住吉町守堂・住吉町雨ノ神・住吉町牛神前・住吉町小原田・住吉町垣添・住吉町室ノ内・住吉町牛神・住吉町牛神東・住吉町観音林・住吉町小坂山・住吉町小林・住吉町堂ノ本と住吉町新堂・御影町郡家の各一部。

九郎左衛門新田は、庄屋吉田九郎左衛門が開発した土地で、その庄屋の名から由来するという。

住吉川沿いに反高林という地名があった。むかし、地質が粗悪で収穫であてにできないところは反別だけ検定して、ごく軽い税がかけられた。こうした土地を反高場といったが、ここが林であったため呼ばれた地名。

守堂は、むかしこの地に薬師堂があり、「吉田」の項で触れた吉田定房の三男の三男・幸麿が堂守をしていたことから由来したと考えられる。

小原田は、『住吉村誌』によると古図には「小原台」となっている。早く開墾された野原の小高い田んぼがあったところであろうか。古い字に西開地、井上、十三目などがあり、十三目は、道の下（旧字）の東部にあった九文目と共に条里制の遺名だといわれている。

室ノ内は、ここに菟原郡の郡衙があった場所ではないかといわれている。隣の御影町域に郡家（ぐんげ）という字があるが、郡家というのは、郡の役所のある集落全体を指すもので、役所の所在地は、館の古語ムロツミが

転化した室の内にあてるべきではないか、と落合重信氏は唱えている。

☆住吉東町（すみよしひがしまち）

昭和44（1969）年からの町名で、元は住吉町瀬川・住吉町道の下と住吉町宮東・住吉町吉田・住吉町古新田・住吉町鬼塚・住吉町泉・住吉町求女の各一部。昭和45年住吉町反高林の一部が編入された。

☆住吉浜町（すみよしはままち）

昭和40（1965）年に新兵衛新田と浜新田の各一部、そして、魚崎町地先の公有水面埋立地が住吉浜町となる。

☆住吉南町（すみよしみなみまち）

昭和44（1969）年、住吉町浜新田、そして魚崎町魚崎の一部が住吉南町となった。

呉田（ごでん）は御田のことで、住吉神社の御田があったところの意味だといわれている。新兵衛新田は、呉田に住んでいた医師山内新兵衛が開発したところから由来する。また浜新田は海浜に開かれた新田で、ここも古くは新兵衛新田と呼ばれていたという。

☆住吉山手（すみよしやまて）

昭和51（1976）年からの地名で、元は住吉町池床・住吉町山下・住吉町松本・住吉町川向・住吉町縄手下・住吉町手崎・住吉町渦森・住吉町丸山・住吉町井出口・住吉町安場・住吉町焼ヶ原・住吉町西谷山と住吉町観音林・住吉町小坂山・住吉町牛神東・住吉町小林・住吉町堂ノ本・住吉町落合・住吉町荒神山・住吉町鍋島・住吉町九重ヶ坂・住吉町赤塚山・住吉町鴨子ヶ原１～３丁目・御影町御影・御影町郡家の一部。

観音林は、ここに慈寺明寺という禅宗の大寺院があった。堂塔伽藍の整った立派な寺だったようだが、永正元（1504）年、「慈明寺流れ」といわれた大洪水で流された。その後、天文年中に観音堂が建てられたが、天文14（1545）年、またも大洪水に見舞われ、観音像は堺の海岸に流れついたというが、観音堂の跡は後まで雑木林の中に残っていた。明治以後、観音堂のあった林として観音林と呼ぶようになったという。

荒神山は、『住吉村誌』によると、「粗暴でいわゆる“荒ぶる神”式であることがうかがわれる。この荒ぶる神の遺跡として荒神山の名がおこったのだろう」と記述されている。いわゆる山の荒れを鎮める荒神信仰から由来されたと思われる。

赤塚山は、土地の色が赤くそれによって住民の目印となる山の意味・またはアカは梵語の供養の意味、あるいは石器や土器、銅鐸を出土する古い土地だから塚（古墳）があったとする説など多種多様な意見があるが、どれも

決め手には欠けている。

☆住吉台（すみよしだい）

昭和52（1977）年からの地名で元は住吉町大谷・住吉町小峰ヶ原・住吉町落合・住吉町荒神山。

☆渦森台（うずもりだい）

この地はもともと渦ケ森（うずがもり）といったが、町名を定めるさいに、渦森台とした。

渦ケ森の由来には多くの説がとなえられている。中でも、渦は秦氏（はたうじ）が朝廷から与えられた太秦（うずまさ）のことで、秦氏の居住地をさすという説が有力。その他、渦ケ森は渦和森であるとして、朝鮮からの渡来人と倭（原住民）との融合した氏族のいた森だという説や、昭和9（1934）年に見つかった渦ケ森銅鐸を手がかりに銅鐸の見つかった旧字加茂は出雲系の人たちの集落だったとして、渦森山上はウズモリ、つまりアツモリ神、神の集まる祭祀遺跡だ、とする説などがある。

もとは住吉町渦森、住吉町西谷山、住吉町赤塚山の各一部で、昭和46（1971）年に渦森台1～4丁目となり、昭和55（1980）年には一部が鴨子ケ原1～3丁目に編入された。

☆鴨子ケ原（かもこがはら）

『住吉村誌』には「その昔、ここに居住した出雲系の加茂氏がいた原という意味から、加茂氏ケ原➡鴨子ケ原となった」とある。

昭和51（1976）年にはそれまでの住吉を冠称とする住吉鴨子ケ原町から、住吉鴨子ケ原１～３丁目、住吉町赤塚山、御影町西平野の各一部を合併した鴨子ケ原１～３丁目と住吉山手１～９丁目に分かれた。また、昭和55（1980）年には渦森台１～４丁目の一部が編入され、現在の鴨子ケ原１～３丁目となった。

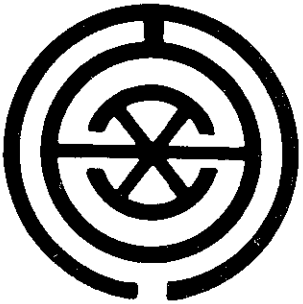
☆向洋町中・向洋町西・向洋町東
（こうようちょうなか・－にし・－ひがし）

向洋町はポートアイランドに次ぐ神戸市第二の人工島・六甲アイランドに付けられた町名である。六甲アイランドが大阪湾に面し、まさしく海に向かうところからこの町名が付けられた。現在、向洋町中・西・東と三つに区分されているが、西・東は昭和54（1979）年に、中は昭和61（1986）年にそれぞれ名称が付けられた。

六甲アイランドは昭和47（1972）年に造成工事が着工されており、完成すれば港湾施設、産業用地、文化レクリエーション用地を有する、580㌶の面積（ポートアイランドの1.3倍）をもつ海上都市となる。島とＪＲ住吉駅の間を、平成２（1990）年に完成した六甲ライナーが走り、将来は３万人の人口を計画している。

（道谷　卓・望月友二）

魚崎の史跡と町名



旧魚崎町町章

この町章は大正10年に制定され、五百崎（いおざき）の「五百」を図案化した。

【魚崎の史跡】

① 覚浄寺（魚崎南町７丁目）

浄土真宗西本願寺末。開基・創立年代は不詳。本尊は阿弥陀如来。現在の本堂は、延享３（1746）年の建築である。境内に「明治６年魚崎小学校開校の地」の碑がある。明治６（1873）年９月から明治16（1883）年７月25日までの９年８ケ月の間、覚浄寺の庫裡を利用して勉強していた。

② 永思堂（魚崎南町７丁目）

覚浄寺の西北隅にある。家型の石の祠で、山崎闇斎ら４人を祀っている。明治31（1898）年に建てられた。山本復斎の兄良貴が、元禄11（1698）年に母を追慕し、弟復斎と共に孝道を明らかにする目的で建てたものがはじめである。

山本復斎…江戸時代中頃の儒学者。延宝８（1680）年に魚崎の酒造家に生まれる。17才の時、浅見絅斎の門下になる。46才の時に「雀松精舎」をつくって子弟の教育にあたった。享保15（1730）年に死去。

③ 魚崎八幡神社（魚崎南町３丁目）

旧魚崎村の氏神。祭神は、応神天皇。元々は、雀の松原の地にあり、雀神社と呼んでいた。境内には、酒樽業

者から寄進された手水石や、酒造業者からの石灯籠がある。本殿の裏には、神功皇后が朝鮮出兵の帰りに、船をもやった浜辺の松の名残といわれている「神依りの松」の松の切り株がある。境内北の児童公園のなかに、旧魚崎町の道路元標がある。

④　山邑家住宅（魚崎南町４丁目）

江戸末期の民家建築。県指定の重要文化財であるが、一般公開はされていない。部屋は８室に分かれ、土間出入口の左手に、奥に向って口の間・二の間・奥の間が並び、その背面に中の間・居間・納戸が続き、さらにその奥に台所と板間の二室がある。また、土間の右手には炊事場・洗い場・使用人室などがある。

⑤　雀の松原（魚崎西町４丁目）

昔、魚崎一帯が松林だったことを伝える史跡。「雀の松原」の地名は、古来からの書物によくでてくる。

「千代に替わらぬ翠は、雀の松原、みかげの松、雲居にさらすぬのびきは…」　（源平盛衰記）

「葦屋の松原、雀の松原、布引の滝など御覧じやらるる…」　（増鏡）

「一族手勢二百余騎、雀の松原の木陰に控え…」　（太平記）

「滝川左近（中略）西宮、いばら住吉、あし屋の里、雀が松原…」　（信長公記）

この松原にたくさんの雀がいた頃、３年に一度ぐらい

丹波の雀と大合戦をしていた。年によっては、こちらから丹波の方へ攻撃にいったという。この雀合戦を見に遠くから人がやってきた。その見物客を相手に、戦いで死んだ雀を焼いて商売をする村人もでてきた。この焼き雀は、江戸時代には名物になっていた。

この辺りは、佐才郷と呼ばれ雀部朝臣という豪族が住んでいたことから、雀部氏の松原→雀の松原に変化したものと思われる。

なお、魚崎西町の広場に、

「竹ならぬかげも雀のやどりとはいつ名にしめし松はらの跡」　中納言公尹

「杖とめて千代の古塚とへよかしここやむかしのすゝめ松原」　よみびとしらず

の歌碑が残っている。

⑥　旧魚崎町役場（魚崎中町４丁目）

鉄筋コンクリート３階建の旧魚崎町役場は昭和12（1937）年10月に完成した。合併後は区役所魚崎出張所が置かれたが昭和32（1957）年から東灘市民病院になった（昭和47年には市民病院東灘診療所となる）。昭和51（1971）年には修復され、現在では東灘文化センターとして市民の文化活動のよりどころとなっている。

（望月　浩）

【魚崎の現行町名】

☆魚崎北町・魚崎中町・魚崎西町・魚崎浜町・魚崎南町（うおざききたまち・ーなかまち・ーにしまち・ーはままち・ーみなみまち）

魚崎の由来はこれまでに多くの説が述べられている。『日本書紀』巻十に、応神天皇の31年、伊豆国から枯野という名のすばらしい船が献納されたが、長い年月のうちに老朽したので船材をたき木として塩を焼いた。そして、これで五百籠の塩ができた。当時、塩は大変貴重なものだったので、この塩を諸国にわけ与えると同時に船を造るよう命令したところ、五百隻の船が一挙に武庫の水門（みなと）に集まったとある。この話をもとにして五百崎（いおざき）の名が付いた、という。『摂陽群談』には、俗に与佐喜（よさき）といっていたと述べている。また、神功皇后が三韓出兵の際、全国に命令し五百隻の船を造らせ、この浜に結集させたという話から五百崎と呼ぶようになったという話もある。

しかしながら、このような話はあくまで俗説であり、真実か否かはわからない。『魚崎村誌』には「いつのころから定かでないが、この浦に不漁が続いて村じゅう難渋したおり、地頭に対して〝五百崎〟の名を〝魚崎〟に改めたいと願い出、お許しを得た」と記述されており、『武庫郡誌』はそれを引いて「元和7（1621）年、庄屋

の松尾仁兵衛が領主戸田氏鉄に改称を願い出て、その後大漁をもたらした功績で苗字帯刀を許された」と、付け加えている。また、『西摂大観』には、この辺りが漁業を行なった所から魚の集う崎（魚崎）というようになったのであろうと言っている。

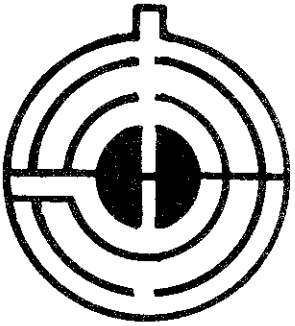
いずれにせよ、魚崎は古代、摂津国菟原郡佐才（ささい）郷にふくまれていた。武内宿禰の子孫の雀部朝臣（ささべのあそん）が住んでいたことから、ササイと名付けたと言う。ササイは「雀」とも書くところから、鎌倉時代までに「すずめ」と読み変えられ、平家物語や太平記などの古典に登場する古来景勝地である「雀の松原」の名の起こりとなった。

魚崎は中世以来の郷村、魚崎と横屋が明治22（1889）年の町村制施行の時に魚崎村となったもので、神戸市に合併してからも横屋は町名として残っていた。横屋は神主のことで、その家が神社の隅にあることからそう呼ばれていると言われる。そうならば、この横屋は五百崎八幡神社の横屋であろうか。しかし、こうした横屋の町名も昭和44（1969）年の住居表示実施で消えてしまった。

なお、魚崎西町は昭和44（1969）年に、北・中・南はその翌年に付けられた町名である。また、魚崎浜町は、浜横屋地先の公有水面の埋立て地で、昭和40（1965）年に名付けられ、もとの陸地とは魚崎大橋でつながっている。

（道谷　卓）

本庄の史跡と町名



旧本庄村村章

制定年は不詳だが、「本庄」を図案化した。

【本庄の史跡】

① 春日神社（北青木）

旧西青木村の氏神。祭神は、天児屋根命。境内には、昭和13（1938）年の阪神大水害の記念碑がある。碑の裏面には、「７月５日阪神間六甲山麓ヲ襲ヒタル水災ハ天井川ヲ氾濫セシメ遂ニ西青木全區五百餘戸ニ甚大ナル水禍ヲ及ボセリ…」と刻まれている。

② 八坂神社（青木５丁目）

旧青木村の氏神。天保11（1840）年の創建。素盞嗚命が祭神。境内に旧本庄村道路元標がある。これは、明治になってから作られたもので、村から村へと道路に沿ってどれだけの距離があるかを正確に測ったときに、その目印として置かれたものである。

③ 進徳丸（深江南町５丁目）

大正12(1923)年に神戸三菱造船所で造られた。はじめは、神戸高等商船学校（現神戸商船大学）の練習船で、鋼鉄帆船であったが、後に昭和19（1944）年に汽船に改装された。現在は神戸商船大学海岸運動場に保存され、一般公開されている。

④ 踊り松（深江本町４丁目）

むかし、神戸商船大学養正館のあたりに、松の大木が

あった。この松の根元付近に、森の稲荷神社のご神体が流れつき、村人が踊って迎えたという話や、洪水の時に森の稲荷神社からご神体が流れついたところなので喜んで踊ったという話から、踊り松の名がついたといわれている。

⑤　旧本庄村役場（青木４丁目）

昭和４（1929）年８月に完成した。鉄筋コンクリート造り２階建て。神戸市合併後は、区役所の本庄出張所となった。昭和33（1958）年２月からは、本庄公民館として利用されている。

旧本庄村役場

⑥　踊り松地蔵（深江本町３丁目）

踊り松付近や高橋川の改修工事の時に出てきた近世の一石五輪塔や石仏を集めている。

⑦　本庄共同墓地（深江北町５丁目）

旧深江・青木・西青木・中野・小路の村々の共同墓地である。室町時代のものと思われる宝篋印塔が現存している。第２次大戦の空襲によって墓石が黒く焼けただれているものもある。

⑧　大日霊女神社（深江本町３丁目）

文明13（1481）年に、薬王寺の住職観空が蓮如に帰依し、真言宗であったお寺を浄土真宗に改宗した。その時に本尊も大日如来から阿弥陀如来に改めたため、大日如来を村人がおまつりしたのが、創建だといわれている。境内には「深江史の庭」として、いろいろな記念碑や石碑を置いている。古いものでは、正徳２（1712）年寄進の高橋川の石橋の一部や元禄７（1694）年、享保11（1726）年の年号が刻まれた石灯籠の竿の部分がある。

⑨　稲荷筋

阪神電車の深江駅の東側の南北に走る道路。森の稲荷神社へ通じる道なのでこの名がついた。

⑩　魚屋道の碑（深江北町３丁目）

江戸時代初期には利用されていたという、有馬と神戸

の市街地を結ぶ六甲越の交通路。深江の浜でとれた魚を有馬へ運んだので魚屋道と呼んだ。江戸時代には、抜け荷の道といわれ、小浜（宝塚市）・生瀬（西宮市）などの宿駅と東灘地域の村々と争論があった。

⑪　正寿寺（深江本町３丁目）

元々は、薬王寺という真言宗のお寺があった。文明年間に、浄土真宗に改宗。寺名も延寿寺と改名。その後、寛永10（1633）年に深江の永井三左衛門が出家し、永井山正寿寺と改名した。

⑫　札場筋

東灘小学校の西の南北の道路をいう。札場筋と旧浜街

魚屋道の碑（右）と稲荷筋

道の交差するところに、江戸時代に高札（放火・切支丹・毒薬・徒党・鉄砲使用などの禁制や人馬賃銭などに関することがらが公示されたもの）が立てられていたという。

⑬　深江北町遺跡（深江北町２丁目）

昭和59（1984）年10月～12月、61（1986）年３月～５月にかけて発掘調査が実施され、弥生時代末期（２～３世紀）の円形周溝墓や奈良～平安時代の集落と水田跡が見つかった。周溝墓とは、周囲に方形または円形に溝をめぐらせた低い墳丘を有する墓である。現在は県営住宅になっていて、現場には記念碑が、また遺跡の模型が神戸深江生活文化史料館に展示されている。

⑭　山の神の祠

山の神は、春には山からおりてきて田の神になり、秋に稲を実らせたあと、山に帰っていくと人々から信仰されている。深江から有馬へ続いている魚屋道の途中、風吹岩の南に深江地区の人が信仰している山の神の祠がある。安政５（1858）年の文字が刻まれている。

（望月　浩）

【本庄の現行町名】

☆青木・北青木（おおぎ・きたおおぎ）

今はオオギと呼んでいるが、青を（オオ）と読む地名は他にも見られる（たとえば青梅市・青梅島）。元はアオキと呼んでいた。伝説ではアオキの北にある保久良神社の神様が、青い海亀にのってアオキに流れついたところから、青亀（アオキ）と地名がついたといわれる。かつては東灘の浜一帯が松原だったことからつけられた名であろう。青木は昭和46（1971）年6月に旧新浜町・東浜町・中浜町・西浜町・文教町・松本町・竹本町・梅本町が、北青木は旧高橋町・大倉町・江ノ元・寺門町・古堂町・本町・前田町から成った。

☆本庄町（ほんじょうちょう）

昭和47（1972）年6月に、旧長田・大町・長者筋と栄通・札場通・稲荷筋・薬王寺町の各一部から本庄町になった。

本庄（荘）は、中世に菟原郡六荘（開墾地のこと）のひとつ「本荘」で、小路・北畠（畑）・田辺・中野・森・深江・東青木・葦屋・打出・三条・津知がその範囲であった。（摂津志）

江戸時代に俗にいわれる本庄九ケ村は、前記から葦屋

と打出を除いた村々である。現在は森南町と深江北町にはさまれた限られた地域であるが、「本庄」はかつては前記のような広範囲な地域の名称であった。ちなみに、本庄幼稚園は深江本町４丁目に、本庄小学校・本庄中学校・本庄公民館は青木４丁目にある。

☆深江本町・深江北町・深江南町・深江浜町（ふかえほんまち・－きたまち・－みなみまち・－はままち）

現在は海岸線も埋め立てられて防潮堤がずっと続き、かつて砂浜であった様子もしのびようがない。だがこの深江という地名は、深い入江であったことから名づけられたのだろう。ちなみに深江の海岸はむかし、琴の浦と呼ばれ、明治13年頃まで浦役場があった（武庫郡誌）。琴のような曲線の海岸線であったためであろう。ただ、深江の浜は遠浅で船の停泊には適していなかったので、港としての機能は御影にゆずっていた。

阪神電車深江駅の南に、大日霊女神社がある。社伝によると、文明13（1481）年に薬王寺の住職観空が、浄土真宗の布教をしていた蓮如上人の教えを聞いて、いたく感激し、蓮如に帰依した。そのため真言宗であった寺も正寿寺と名をかえて浄土真宗に改宗した。その時に本尊も大日如来から阿弥陀如来に改めたため、寺を出された大日如来を村人が祀ったのが大日霊女神社の創建だといわれている。今は残っていないが、薬王寺という字が深江北町４丁目付近にあった。東灘区には、浄土真宗の寺

が多いが、他の寺もこのような理由からであろうか。

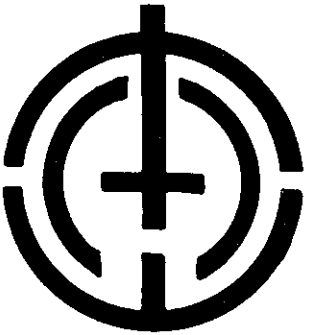
俗謡に「深江越えたら大日如来、高い高橋踊り松」とうたわれたものがある。大日如来は前記の大日霊女神社のことで、高橋は高橋川をさす。この川は古代の条里制に基づく水田の潅漑水路の跡だとみられる。なぜなら、六甲山地南側を流れる川は南北に流れるのが普通であるが、東西に流れているからである。これは自然の流路でなく人為的に東西に流れを変えたということが明確である。

踊り松は、今の神戸商船大学の敷地内にあった。その松の枝ぶりからつけられた名であろうが、森の稲荷神社の神様がこの松の根元に流れつき、村人が喜んで松の回りを踊ったところからつけられた名前だと、言い伝えが残っている。この踊り松は明治28年まで森稲荷神社のお旅所とされてきた（武庫郡誌）。その後、大日霊女神社にお旅所が移り、毎年卯の葉まつりの時には森稲荷神社からダンジリがくりだし、大日霊女神社までの稲荷筋と呼ばれる道は昭和のはじめまでにぎわったという。

深江北町は、昭和47（1972）年6月に旧美ノ江・高橋町と永井町・繁昌通・栄通・札場通・稲荷筋・薬王寺町の各一部から成立した。深江南町は、旧神楽町・東町・見附町・磯島町・新浜町と踊り松の一部から成り立ち、深江本町は、旧永江町・長栄町・大日町と踊り松町の一部から成立した。深江浜町は昭和44年に埋立地第4工区が命名されたものである。

（望月　浩・望月友二）

本山の史跡と町名



旧本山村村章

制定年は不詳だが、「本山」を図案化した。

【本山の史跡】

① 西岡本遺跡（西岡本６丁目）

縄文時代から明治時代にかけての複合遺跡。約8000年前の縄文時代早期の竪穴式住居跡が見つかっている。また、後期古墳13基が確認されていて、野寄群集墳と命名された。その他にも水車遺構が２基見つかっており、その上段にはドイツ人が建てた異人館の基礎も確認されている。

② 野寄の大石（西岡本４丁目）

長さ６ｍ、高さ３ｍほどの大きな石が町の中にある。昔は旅人の目印になったこともある。何の目的でここにあるのかはわからないが、近くの大日女尊神社の大石となんらかの関係があるのかもしれない。よく農村のたんぼのなかの大きな石は、不思議な力が宿っていると信じられ、信仰の対象になっていることが多い。

③ 大日女尊神社（西岡本４丁目）

創建年月日は不詳。祭神は大日女尊・素盞嗚尊。むかし、住吉川の洪水の時に深江まで神社が流された。深江で祀っていたところ（大日霊女神社）、神様が「野寄に帰ろう、野寄に帰ろう」といったので、今の地に祀り直したという話が残っている。

④　岡本の梅林（岡本６丁目）

岡本６、７丁目あたりは、江戸時代には「岡本梅林」として『摂津名所図会』に記載されている名所であり、「梅は岡本、桜は生田、松のよいのが湊川」という唄にもうたわれていた。

⑤　ヘボソ塚（岡本１丁目）

旧岡本村字マンパイにあった古墳時代前期の前方後円墳。「岡本のオサバに立てるヘボソ塚、布織る人は岡本にあり」という唄が伝えられているが、その意味は不明である。現在、東京国立博物館に保存している出土品のなかに、古鏡６点があるが、それが中国からの舶載鏡なので、オサバ、マンパイの地名も、中国からの渡来人に関

岡本の梅林（『摂津名所図会』より）

係する地名かもしれない。オサバ＝筬場、マンパイ＝万梅という字をあてる説もある。

⑥　鷺宮八幡神社（本山北町６丁目）

旧北畑村の氏神。むかしは、この神社の辺りはかなり樹木が茂っていて、鷺の森と呼ばれていた。鷺の森の名残として、欅の大木が一本残っている。樹齢800年といわれ、高さ20㍍ほど、周囲は５㍍あり、神戸市の保護樹木に指定されている。むかし、村人はこの木の枝にカラスがとまって鳴くと、その声に耳を傾けた。カラスが長く「カーアー、カーアー」と鳴くと、必ず村のなかに不幸があると信じられていたからである。

⑦　西光寺（本山北町５丁目）

浄土宗で、本尊は阿弥陀如来。寺にある観音菩薩は、慶長年間、佐和山城主石田三成の母の念持仏で、合戦の際敵の矢の攻撃を受けたが、この観音が身代わりになったという。また、境内の隅にある五輪塔・石仏の群のなかに、青木から移されたといわれるキリシタン灯籠の竿の部分がある。

⑧　小路八幡神社（本山北町５丁目）

旧小路村の氏神。小路の地名は中世の荘園の荘官「荘司」から起こったと思われる。

なお、境内のすぐ下に流れている川に、「臼井橋」という橋があるが、源頼光（源満仲の子）の四天王の一人

といわれている碓井貞光の子孫、臼井氏からきている。

⑨　中野八幡神社（本山北町４丁目）

旧中野村の氏神。１月15日には昔から弓の神事が行なわれている。毎年トウヤという家が順番で決められる。そのトウヤの家から弓・矢・的・お供えなどを持ち、神社で参拝する。参拝したあと、境内の木に的をかけ数本の矢を放つ。

⑩　保久良神社（本山町北畑）

延喜式に載る古社。祭神は素盞嗚尊・大国主尊・椎根津彦尊など。５月５日の例祭には氏子地（北畑・中野・小路・田辺）からダンジリが出て賑わう。社殿の周辺には

保久良神社

磐座信仰の名残と思われる巨石がいくつか見られる。またこれは、日本庭園の源流という説もある。境内からは弥生時代の石器・土器も出土している。

灘の一つ火…鳥居前にある常夜灯。古来から沖を行く船の夜の目印とされてきた。伝説では、日本武尊（やまとたけるのみこと）が熊襲（今の九州）遠征から帰る途中、大阪湾で夜になり、航路がわからなくなった。神に祈ったところ、北の山の上に一つの灯が見えた。それを頼りに船を進めたところ、無事に難波へ帰ることができた。それがこの灯のおこりだという。現在は文政8年(1825)に建立された石灯籠に、電灯をつけて東灘の町を照らしている。

⑪　森稲荷神社（森北町4丁目）

社伝では、霊亀元（715）年卯月卯日の夜に、深江の沖に光が輝いた。村人は不思議に思い海辺に集まると、一基の神輿が現われた。そして、「私は、稲荷大明神である。この山手の森かげに祀れば里人を幸せに守ろう。」と言った。そこで村人たちは、現在の地に祀るようになった。長い間保久良神社と共に本庄九ケ村（深江・青木・森・中野・田辺・小路・北畑・津知・三条）の氏神であったが、明治5（1872）年に県の命令で森・深江・青木の三ケ村だけが氏子になった。

⑫　朱鳥居と道標（森南町３丁目）

鳥居…昭和２（1927）年に建てられたもので、高さは5.8㍍。昭和20（1945）年５月11日の空襲では、米軍にとって青木にあった川西航空機甲南製作所（今の新明和工業）が攻撃目標のひとつであった。このことは５月５日に撃墜されたＢ29の飛行士が持っていた航空写真からすでに知られていた。その写真には11日の川西航空爆撃計画の付近の目印として朱鳥居が記入されていた。

道標…朱鳥居のすぐ南西にある。「稲荷之社従是三町」の銘がある。革令紀行（江戸時代の狂歌師大田南畝＝蜀山人が文化元(1804)年に長崎へ長崎奉行支配勘定役として赴任する際の旅行記）に

朱鳥居と道標

も「稲荷之社自是三丁」とある。

⑬　琴の橋（本山中町２丁目）

本山の中野の地にかつて、溝滝川という細い川があった。西国街道がこの川をわたるところに大きな石でできた橋があった。大名行列がこの橋を渡ろうとすると、橋の下から琴を弾く音が聞こえてきた。また、橋の石の裏側には、和歌が刻まれているという人もいた。この橋も大正年間の国道工事の時になくなったという。

⑭　山路城（田中町付近）

御影にあった平野城と同様に、南北朝時代に築かれた赤松氏関係の城であったと思われる。『摂津志』には「山路城　在田中村　観応年間　赤松範顕拠此」とある。現在の地形から城跡はうかがえないが、池ノ内・城ノ前・的場などの地名が、城のあったことをしのばせてくれる。現在の本山中学付近が本丸で、手水公園が二の丸であったといわれている。なお、ここは普段の居館で北方の五百山に“戦時の城”があったといわれている。山が開発されたときに、古井戸と、甲冑が見つかったという。

⑮　旧本山村役場跡（岡本１丁目）

現在の東灘図書館の場所に、昭和２（1927）年に完成した旧本山村役場があった。神戸市合併後は区役所の本山出張所となる。今では図書館の前に「旧本山村役場跡之碑」が建てられている。

（望月　浩）

【本山の現行町名】

☆甲南町・甲南台（こうなんちょう・こうなんだい）

昭和45（1970）年6月に、本山町田中・野寄の一部と魚崎町横屋の一部が甲南町1～5丁目になった。

甲南台は、昭和43（1968）年5月本山町中野と森の一部が新しく開発されたところ。開発業者の命名によるものといわれている。

ともによく六甲山の南という意味で使われていることばである。

六甲山の南は神戸の市街地すべてが含まれるが、東灘から芦屋にかけては甲南の名のつく学校が多い。岡本に甲南大学、森北町に甲南女子大学、芦屋市に甲南高校がある。

甲南町になる前の本山町田中には、平田・町ノ浦・松本・高田・六反田・石田などが、野寄には七ツ塚・池ノ本、魚崎町横屋には、内田という小字があった。

☆岡本・西岡本（おかもと・にしおかもと）

本山町岡本、田中、田辺の一部が、昭和48（1973）年6月に岡本1～9丁目になった。

西岡本は、昭和54（1979）年8月に本山町野寄、岡本の一部が1～7丁目となった。

岡本は岡の下という意味であろう。ただこのあたりはすべてその地形に該当するので、この岡本の岡は他とちがう何か特別なものがあったのかもしれない。

岡本は昔から、梅林の名所として江戸時代の『摂津名所図会』などにも描かれている。多くの文人たちが訪れたようである。兵庫の俗謡に「梅は岡本、桜は生田、松のよいのが湊川」とうたわれた。現在では、盛時のおもかげはないが、保久良山に保久良梅林が昭和50年に植樹され、昭和56年には、岡本6丁目に「梅林公園」（岡本公園）がかつての梅林をしのばせるようにつくられた。

岡本1丁目の字マンパイという地名があった付近に、ヘボソ塚という古墳時代前期の前方後円墳があった。ヘボソもマンパイもその意味はわからないが、マンパイ＝万梅という説もある。

梅だけでなく、岡本5丁目には水上勉の小説『桜守』のモデルになった笹部新太郎氏の邸宅後を公園にした「桜守公園」（岡本南公園）もある。

岡本付近には、釈迦田・サイノ神・馬田・篠久保・西良寄・宝蔵・高井などの小字があった。

☆田中町（たなかちょう）

田中の地名は江戸時代につけられたもので、それ以前は庄戸村と呼ばれていた。（本山村誌）

田中という地名は、水田の中という意味の地名で、各地に多く見られる。

昭和45（1970）年6月に本山町田中、岡本、野寄の一部が田中町1～5丁目になった。

『摂津志』という江戸時代の地誌に「山路城　在田中村　観応年間　赤松範頼拠此」とある。『播州名所巡覧図絵』には「片町より西、山の方、田の中に跡あり。此所、赤松信濃ノ判官彦五郎則実、籠城の跡なり。」とある。城主の記載がちがうが、南北朝時代に摂津は赤松則資が守護をしていたので、この地に赤松氏関係の城が存在していたのだろう。この付近にあった小字の的場・城ノ前などからもその存在がうかがえられる。

『武庫郡誌』には、「鎌田付近は老松鬱蒼として、如何にも城跡たるにふさはしき所たるを見れば、或ひは前説の眞なるに非ざるか」と書かれてある。

旧本山町田中には、馬田・高田・平田・石田・鎌田・五反田・久保田・六反田などの小字があったが、この地名からも田んぼが多かったことがうかがえる。

☆森北町・森南町（もりきたまち・－みなみまち）

昭和47（1972）年6月に、旧神岡町・東ノ町・天神町・村上町・山田町と西ノ町・北ノ町・坂下町の各一部から森北町になり、また旧今北・昭和通・丈土・古川・前ノ町と宮川の一部から森南町になった。

森という地名は、森北町4丁目にある稲荷神社の森が広がっていた（本山村誌）という説と、『和名抄』や『摂津志』にでてくる古代の津守郷という記述から、住吉

の津（湊）を津守連祖田裳見宿称がいたことからつけられたという説（武庫郡誌）がある。だが、神社そのものを杜＝森と呼んでいたとする説もあるので、この地域では保久良神社・本住吉神社とならんで古くから信仰の対象とされてきた稲荷神社を森と呼んで、ここからつけられた地名かも知れない。なお、稲荷神社は社伝によると霊亀元（715）年の創建だといわれている。

☆本山町岡本・野寄・田中・北畑・中野・田辺・森
（もとやまちょうおかもと・のより・たなか・きたはた・なかの・たなべ）

明治22（1889）年、町村制の実施と共に「本山村」と称した。神戸市と合併して本山町になったのは、昭和25（1950）年になってからである。本山の名の由来は、田辺・北畑・小路・中野・森の各村が属した。「本庄の庄」と田中・岡本・野寄の三ケ村が属した「山路の庄」の頭文字を取り命名したという。（『武庫郡誌』）

野寄は『摂陽郡談』にはノイリ（野入り）とあり、住吉川沿いに野が入り込んだから名付けられた地名か、あるいは条里制の遺構とされる菟原郡野四里による説もある。（『本山村誌』）

北畑は地形（北方の畑）によって付けられた地名だと思われる。字ザクケ原には『延喜式』に載る保久良神社がある。鎌倉時代の建長２（1250）年に改築したという記録があり、本庄九か村の総鎮守として信仰された。祭

神は初め椎根津彦命だったが、後に牛頭天王（素盞嗚尊）祭られたため天王さんと通称されるようになった。社地周辺には、磐座信仰の名残と思われる巨石があり古い祭祀の跡である。なお古来から“灘の一つ火”と呼ばれる常夜灯は社前の突端にあり、沖行く船たちの夜の目印となっていた。

中野は古くは中ノ村と記されており、由来はその位置からきたものと思われる。

田辺は田園地帯の小集落であったところから来た地名であろうか。

☆本山中町・本山南町・本山北町（もとやまなかまち・ーみなみまち・ーきたまち）

昭和46（1971）年6月、本山町中野・森・小路・田辺の各一部が本山中町に、中野・小路・北畑・田中の各一部と本庄町青木・西青木の各一部とが本山南町になった。本山南町は国道2号線以北・ＪＲ東海道本線以南の区域にあたる。昭和48（1973）年6月にはＪＲ以北の本山町森・中野・小路・北畑・田辺の各一部が本山北町になった。

なお、今年（平成2年）本山南町8丁目から、区内では4口目の銅鐸が26年ぶりに出土した。これは、高さ約21cmで偏平鈕式四区袈裟襷文型の銅鐸である。これまでは、ほとんど山中で、しかも偶然に発見されていた銅鐸であるが、この本山銅鐸は平地で見つかり、又、発掘調

査の最中に発見されるというこれまでとはやや違った出土のされかたであった。なぜ平地に銅鐸が埋められていたのかという謎は今後の研究成果に期待したい。

（望月　浩・望月友二）

【参考文献（抄）】

・田辺眞人『東灘歴史散歩』（東灘区役所、昭和55年）
・田辺眞人『東灘の史跡と木かげ』（東灘区役所、昭和50年）
・道谷卓『日本史の中の東灘』（東灘文化センター、平成元年）
・宮崎修二朗『文学のおもかげ東灘』（東灘文化センター、昭和61年）
・神戸市民俗芸能調査団『神戸の民俗芸能・東灘編』（市教育委員会、昭和50年）
・玉木敬太郎『御影町誌』（御影町役場、昭和11年）
・谷田盛太郎『住吉村誌』（住吉町役場、昭和21年）
・谷田盛太郎『続住吉村誌』（住吉学園、昭和47年）
・魚崎町誌編纂委員会『魚崎町誌』（同会、昭和32年）
・本山村誌編纂委員会『本山村誌』（同会、昭和28年）
・本庄村史編纂委員会『本庄村史資料編１・２巻』（神戸深江生活文化史料館、昭和60年～）
・仲彦三郎『西摂大観』（明輝社、明治44年）
・武庫郡教育会『武庫郡誌』（同会、大正10年）
・落合重信『神戸の歴史』（後藤書店、平成元年）
・田辺眞人『神戸の伝説』（のじぎく文庫、昭和51年）
・神戸市教育委員会『神戸の史跡』（同会、昭和50年）
・神戸新聞『神戸の町名』（のじぎく文庫、昭和50年）
・『兵庫県地名大辞典』（角川書店、昭和63年）

【あとがき】

1950年4月1日、東灘旧五ケ町村のうち、御影町・住吉村・魚崎町の三ケ町村が神戸市と合併し東灘区が誕生した。その年の10月10日には残る本庄・本山の両村も合併し、東灘区は現在の区域になったのである。従って、今年は東灘区が発足してちょうど40年という時代の節目となる年にあたり、このような時に我々の街の歴史を振り返り、よりよい未来を築くための糧とすることは意義のあることだと思われる。

昨今、東灘区に限らず、我々の身の回りの景観は刻一刻と変化し、それとともに我々の祖先の歴史の足跡も近代化の中に埋没しようとしている。こうして失われようとしている歴史の足跡を次の世代へ継承して行くのは我々の責務であり、本書はそのような足跡を時代の節目となる時に今一度見つめ直す意味を込めてまとめたものである。なお、本書は三人の共編著であるが、略史は道谷が、史跡は主に望月浩が、町名は三者が原案を書き、それらを三人で討議した。

末筆ながら、本書の刊行を勧めて下さった神戸深江生活文化史料館友の会の小嶋悦廊会長に甚大なる謝意を表する次第である。

１９９０年４月１日

東灘区発足４０周年の日に

道谷　卓・望月　浩・望月友二

◆編著者紹介（五十音順）

道　谷　　卓（みちたに・たかし）

昭和39年、神戸市東灘区生まれ。

現在、関西大学大学院法学研究科在籍、神戸深江生活文化史料館研究員、神戸歴史研究会副代表。

望　月　　浩（もちづき・ひろし）

昭和37年、神戸市須磨区生まれ。

現在、神戸深江生活文化史料館主任研究員、神戸歴史研究会代表。

望　月　友　二（もちづき・ゆうじ）

昭和40年、神戸市須磨区生まれ。

現在、神戸深江生活文化史料館研究員。

ザ・ひがしなだ

―東灘の歴史の足跡をたどる―

平成２年６月１日発行　　頒価300円

編著者　道谷　卓・望月　浩・望月友二

制　作　神戸歴史研究会

発　行　神戸深江生活文化史料館友の会

神戸市東灘区深江本町３－５－７

☎（０７８）４５３－４９８０

東灘区の花・梅

頒価　300円